

12. 認知症の未来

医事万華鏡

高齢になれば誰もがもの忘れや名前が思い出せない経験をするものですが、症状が深刻になったものをつまりは「認知症」と言うのでしょうか。もっとも学術的に認知症は「アルツハイマー病」や「レビー小体型認知症」、「血管性認知症」に「前頭側頭葉変性症」と4つに大別されます。最近では、「糖尿病性認知症」という新たな分類も生まれてきています。その認知症の患者数は今や約500万人。団塊世代が75歳を迎える2025年には700万人を越えると言われていています。その予備群は相当な数にまで上ると言われています。ただ現代病とでも言える認知症ですが、根治療法がないのが現実です。

認知症と言えば、認知症を患い、独居で亡くなった高校時代からの友人がいました。奥様が入院されていたこともあり、またご子息も離れて暮らしていたため仕方なかったのでしょうか。しかし、孤独死というのはあまりに意外なこと、しかも認知症であったとは驚きでした。そう言えば、生前友人と電話で話したとき、一方的に話すばかりで会話が成り立たず、また最後に会ったときは一頃の澁刺として

いた面影が消え失せ、虚ろな眼差しで少し様子がおかしいなという印象を持ったことを覚えています。年賀状に至っては乱雑な字とともに意味があまり解せない内容でした。今思えば、友人の言動は中程度以上の認知症の症状そのものだったということでしょう。かつては社会的に地位の高い仕事に就き、華々しく活躍していたときの様子を覚えていればこそ、その落差を目にすると、何だか寂しく遣りきれない気持ちになるものでした。今ではがんさえ治療可能と言われる時代ですから、患者がその症状すら理解できない認知症とは本当に残酷な病気です。根治療法がないからこそ、認知症は当人以上に周りの家族に対して、絶望的な感情を植え付けていると言っても過言ではありません。

さて、認知症を患い孤独死した友人は、介護する人すらいない、本人は認知症であるが故に気づかない・・・と、現代社会が抱えるこの2つの問題の切実さを、その死をもって訴えかけてくれているようです。われわれはこのことから何を学ぶべきでしょうか。少子高齢化、未婚率の上昇。そしてこれほど医学が発展したとはいえ認知症を根絶するにはまだ時間がかかるという現実を前に、高齢になってからではなく若い世代に対する何らかの介入の重要性が指摘されています。認知症からフレイル、サルコペニアの予防を周知させると共に、高齢でも仕事をしながら集団で暮らせる施設を設置する等、そんなソフトとハードの刷新は、まずは人の意識改革から始まります。

(JMS主幹・野村元久)

